

令和8年度病虫害発生予察特殊報第1号

令和8年7月15日
山 梨 県

病虫害名：クビアカツヤカミキリ *Aromia bungii* (Faldermann)

作物名：モモ

1 発生の経過

令和8年7月15日、甲州市のモモ生産園地において、クビアカツヤカミキリと疑われる成虫1頭が捕獲された。県果樹試験場および県病虫害防除所で確認したところ、クビアカツヤカミキリの雌成虫であることを確認した。当該虫は平成30年に特定外来生物に指定され、生体の飼育、保管、運搬、輸入、放飼が原則禁止されている。

2 国内・県内での発生状況

本種は平成24年に愛知県で初めて確認されて以降、令和8年7月13日現在19都府県で発生が確認されている。

本県では、令和8年7月7日大月市内のサクラにおいて成虫1頭の発生が初めて確認されていたが、果樹生産園地において確認されたのは、今回が初めてである。

3 形態的特徴及び生態

(1) 形態

成虫は体長2～4cm程度で、体全体は黒く光沢があり、胸部は赤く、側面にこぶ状の突起がある。成虫はジャコウのような独特の芳香を放つ液を分泌する。

(2) 生態

東アジア原産のカミキリムシで、中国、台湾、朝鮮半島、ベトナムなどで発生が確認されている。成虫は樹皮に産卵し、ふ化した幼虫は樹幹内に入り込む。幼虫は樹幹内部を摂食しながら約2年間過ごし、そのまま樹幹内で蛹になり、6月以降に成虫となって樹から這い出してくる。成虫はすぐに交尾し、樹皮に産卵する。他のカミキリムシと比べ産卵数が多く、1頭の雌の産卵数は平均350個、最大1,000個以上で繁殖力が高い。また、飛翔力も高く、成虫は一度の飛翔でおよそ40～70m移動でき、被害エリアは1年で2～3km拡大する。



図1 クビアカツヤカミキリ成虫



図2 株元に排出されたフラス

写真提供：埼玉県環境科学国際センター

4 寄主植物

モモ、スモモ、オウトウ、ウメ、サクラなどのバラ科の樹木を好んで寄生すると言われている。

5 防除対策

- (1) 樹体にフラス（木くずと糞が混じったもの）を確認したら、針金やマイナスドライバーなどを差し込んで幼虫を刺殺する。また、登録農薬をフラス孔に噴射する。噴射一週間程度後に観察し、新たなフラスの排出がある場合は再度噴射する。
- (2) 被害の甚大な木は伐倒し、焼却や破砕、薬剤くん蒸を行う。
- (3) 成虫は噛みついたり、独特の匂いの液を分泌するので、道具や靴をビニールで覆い、手袋等を着用した上で捕殺する。
- (4) 成虫を対象に登録農薬を散布する場合は、根元から可能な限り高いところまで散布する。
- (5) 成虫の分散及び新たな産卵防止のため、登録薬剤を散布し、樹幹部にネット（4mm目合い以下で容易に切れないもの）を巻き付ける。設置後は定期的に見回りを実施し、成虫を発見したら捕殺する。

表1 クビアカツヤカミキリに登録のある主な農薬（令和8年7月8日現在）

※農薬を使用する際は必ずラベルの使用基準を確認してください。

2026年7月8日時点の登録内容			適用作物名				
IRAC	対象	薬剤名	モモ	スモモ	オウトウ	ウメ	ネクタリン
1B	成虫	スミチオン乳剤	○	×	×	○	×
3A	成虫	アグロスリン水和剤	○	○	○	○	○
	幼虫	ロビンフード (フラス孔へ噴射)	カミキリムシ類 ○	カミキリムシ類 ○	カミキリムシ類 ○	カミキリムシ類 ○	果樹類のカミキリムシ類 ○
4A	成虫	アクタラ顆粒水溶剤	○	小粒核果類 ○	○	○	○
	成虫	ダントツ水溶剤	○	○	×	○	×
	成虫	モスピラン顆粒水溶剤	○	○	○	○	×
14	成虫	パダンSG水溶剤	○	○	×	×	○
21A	成虫	ハチハチフロアブル	○	×	×	×	○
22B	成虫	アクセルフロアブル	もも類 ○	○	×	○	もも類 ○
28	成虫	テッパン液剤	○	小粒核果類 ○	○	小粒核果類 ○	×

* 詳細は病害虫防除所 HP

(<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>) をご確認ください。

